

近世武家権力の文学的営為に関する研究

本論文は、徳川幕府を中心とした武家権力とその文学的営為について、特に幕府柳営連歌、『帝鑑国説』、仮名草子を主たる研究対象として、武家権力の文学的営為の政治的利用について論じたものである。

本論は、第一章「柳営連歌考」、第二章「帝鑑図説考」、第三章「『竹斎』考」の三章からなる。第一章第一節「将軍の連歌」では、家康から家光までの三代の将軍の文学的営為を柳営連歌を中心に解析し、儀礼的な文芸活動の場にも将軍個人の嗜好や宗教界の状況などに影響されていたことを明らかにした。第二章「二ノ丸権現様興廢記」においては、江戸時代通じて忘れ去られていた江戸城二ノ丸の東照社に着目し、家光の強い意志のもと、その荘厳に鳥丸光広などの文章が用いられていることを指摘する。第三節「連歌御由緒考」第四節「稻荷杜と柳営連歌」では、家光死後家綱の時代から将軍の個人的志向からはなれ儀式化された柳営連歌会も、連歌会に参加する御連衆の詳細な分析によって、政治的宗教的な世情と密接に結びついていることを明らかにした。

第二章第一節「模倣と変容」は、明の万暦初年に刊行された『帝鑑図説』が、十年ほどのうちに版を重ね、日本において秀頼版として刊行されるまでを、中国を含む広範な書誌的調査によって跡づけ、その受容において日本的な変容が起こっていることを明らかにした。更に第二節「唐冠人物の来歴」第三節「唐破風考」では、中国と日本の服飾制度の違いや、建築様式の差異など、従来注目されることのなかった事象を採りあげて、『帝鑑図説』の受容における中国像の日本化という注目すべき点を発見した。第四節「『帝鑑図説』の読まれかた」で、池田光政らの『帝鑑評』という書物を再発見し、もとの『帝鑑図説』と平仮名本とを詳細に対照することで、日本独特の儒教の受容のあり方を浮き彫りにし、日本人の心性に深く根ざす「忠孝一致」なる概念が、幕末になって登場するという旧説を正し、既に近世初期からそのことがみられることを明らかにした。

第三章では、第一節「『竹斎』考」第二節「『竹斎』の視点」で、仮名草子『竹斎』の文体を詳細に分析し、いくつかの位相に分かれることを指摘した。そして続く第三節「艶書の七五調」「恋の七五調」で七五調の歴史的分析を通して、『竹斎』という仮名草子が七五調の文体によって統合されることで、各種の位相が違和感なく混在できていることを明らかにした。第五節「師宣の雲」では、『竹斎』と同時代の菱川師宣の挿絵における飾り枠の分析を通して、七五調の文体の隆盛には、武家社会における恋の抑圧が関わっていることを考察する。本論文の提出者は、如上の課題を解決するにあたり、単に文学にとらわれることなく、従来関係づけられることのなかった、絵画・服飾・建築等を学際的総合的に検討することで、武家権力による文学的営為の政治的宗教的利用について、より鮮明に提示することに成功した点に学術的価値が十分に認められる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。